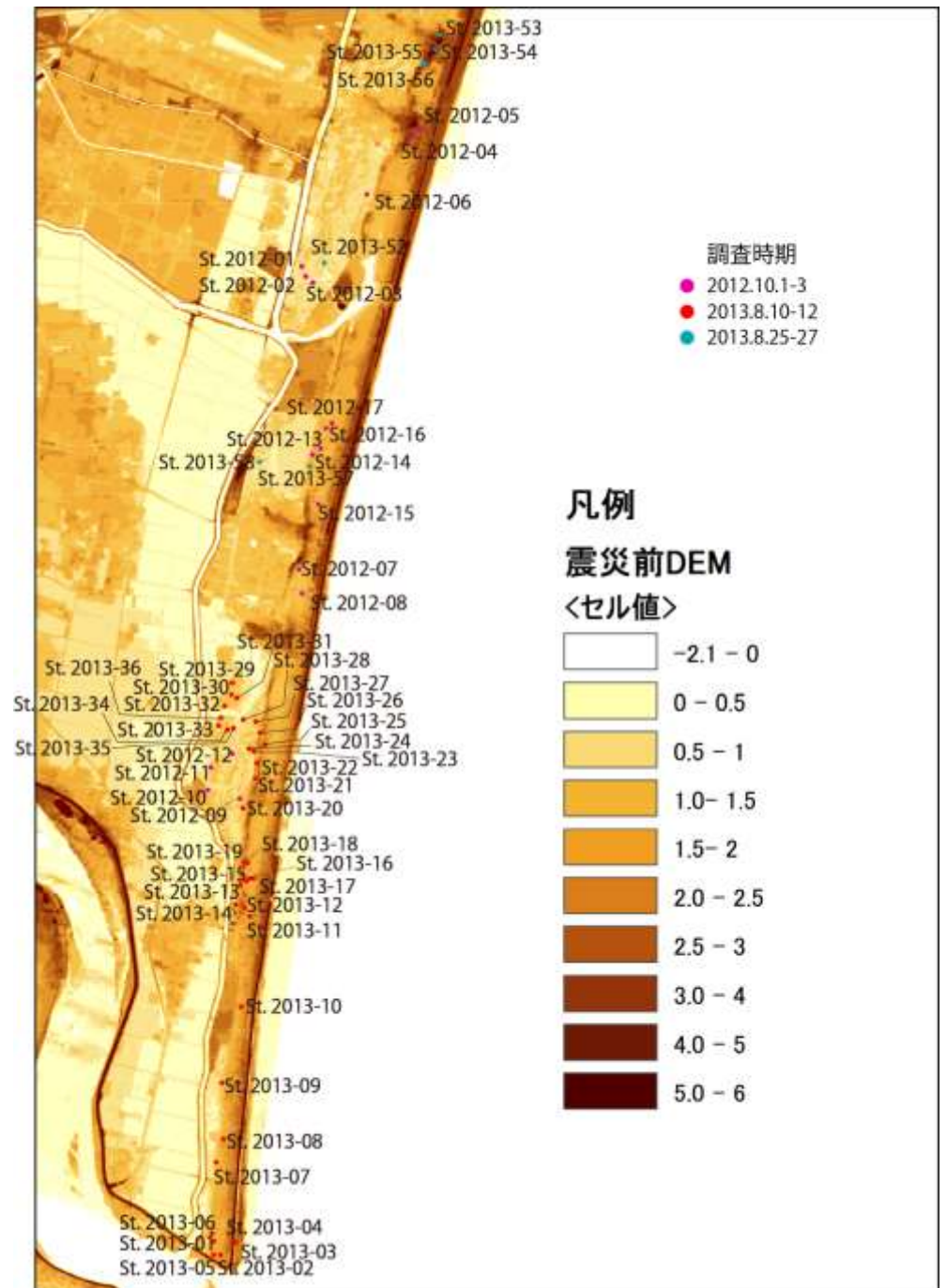


多重防御の基礎となる防潮林の形成に向けた植物社会学的調査の実施～第二弾～

岩沼市の沿岸部には、長年に渡り、維持されてきた広大な海岸林が存在していました。東日本大震災の津波によって、大半が失われましたが、ところどころに森林が残っているのがわかります。これらの残存している森林は周囲よりやや高い土地のために残ったと考えられます。そこで、今回の調査では、前回に引き続き、沿岸部の海岸林の今後考えていくために、海岸林にどのような植物が生育しているのかを2013年8月に調査を行いました（主な調査地点は右図の通りです）。

海岸林の構成樹種は、海に近いという悪条件にもかかわらず、クロマツやアカマツの他に里山的利用がなされた松林やコナラ、オオヤマザクラなど多様な樹種が見られました。林床には、ツタウルシ、テリハノイバラ、ヤブコウジ、ジャノヒゲ、チガヤ、ススキ等の多様な低木、地被植物が、津波の被害を乗り越えて、たくましく生育していることがわかりました。また、海岸林のあった地域を詳細に調べてみると、浜堤と呼ばれる海岸の砂で出来た地形の高まりが存在しており、この地形の高まりの陸側で海岸林が多く残っていることが明らかになりました（写真1）。この浜堤の側で、推定樹齢100年以上のクロマツが発見されました（写真2, 3）。また、海岸堤防沿いのクロマツ林は、ほぼすべて倒壊しましたが、堤防の法面に植栽されていたクロマツなどは一部残存していることが確認されました（写真4）。また、倒壊した松林の跡地に外来種のニセアカシアの侵入を確認いたしました（写真5）。ニセアカシアは生長が早く、コナラなどの在来種を駆逐する可能性があります。

今回の調査では、かつて人の手が入っていた里山的利用の海岸林の姿が見られました。これからの新しい海岸林姿として減災・生物多様性・文化的景観保全を併せ持つ「環境里山林」を再生させていくことが求められると思います。



図：調査地点一覧



写真3：巨木の切り株



写真5：海岸林の中に侵入してきているニセアカシア



写真1：地形の高まり（浜堤）の様子



写真2：クロマツの巨木



写真4：堤防の法面に植栽されていたクロマツ